鈴木ユキオ×関かおり（前編）

シアタートラムでの新作公演を前に、クリエイション中のそれぞれの稽古場を見学した2人。一つの動きをじっくり時間をかけてダンサーと共に模索する関に対して、ダンサーとマンツーマンで振付や身体の演出を淡々と進める鈴木。対照的な創作現場でしたが、そこには、共通する振付家の思いがありました。

ユキオ　ダンサーの基準って、関さんの中ではどのようにありますか？

関　私もそれ、ユキオさんに聞いてみたいと思ってました。オーディションで気になるのは、簡単な言葉で言っちゃうと、雰囲気を持っている人。「運動」というと乱暴だけど、ダンスのテクニックを見せることは求めてないので、例えばちょっと何かがギクシャクしちゃうような人でも、動きの纏ってる空気感とか、味というか、その人自身の何かが垣間見えそうな人がまず第一。選んだ人によってここが良かったというのは違うのですけど。私の創作はグループワークが多いから、その時間を一緒に共有できそうな人かな？

ユキオ　単発のダンサーもいるの？

関　いないです。基本的にはカンパニーメンバーの募集をしてます。今回は出ないメンバーもいます。他には、前からいてくれるダンサーとのバランスや、新しい風を持ってきてくれそうな人とか。
今回のオーディションは、カンパニーのダンサー全員にも付き合ってもらって、この子と合いそうだな、とか、反応が起きそう、とかですかね。ユキオさんは？

ユキオ　僕も前は結構個性的というか、個性重視で、あまりダンサーっぽくない身体の人を選んでいました。僕はダンス出身じゃないので、ダンス言語を使えないと思っている部分もあったりして。最近、やっと自分の身体や感覚を言葉でも説明できるようになってきて、ダンサーに求めるものも変わってきたかな。ダンスをやっている人たちと交流する機会が増えてきたことで、同じ動きでも、ダンスの人はこういう言葉で身体を動かしているのだな、と知ってきたというか。以前は、自分の言語を押し付けていたけど、でもダンサーには伝わらない、なんでできないの？というところもあって。やっと今、こういう風に言えばいいのか、身体の使い方をもっとこうすればいいのか、ということがわかってきた。まだ同じように、雰囲気を重要視しているところもあるけど、身体は動けてもいいな、と最近は思えるようになってきた。
それでも、いまだにバリバリに踊れる人というのは、ちょっと手を出しにくい。ダンスを疑ってないというか…。

関　わかります！

ユキオ　動く気持ち良さってあるのだけどそこが好きな人たちがいて、関さんのカンパニーでもそうだと思うけど、それだと僕の作品では、難しいときがくるんだよね。もちろん、身体が動けたらいいのはある。でも、僕がやっていることは運動の楽しさだけではないので、それをわかってもらうのに時間がかかるんじゃないかと思ったり。そういう意味では、どこか波長が合う人を選んでいるのはあるかな。でもオーディション１回じゃ、結構わからなくて。

関　わかんないですよね、私、２日間とります。

ユキオ　僕も去年、若手プロジェクトで、新しい人たちにいろんな作品に出て

もらう機会を作って、1年くらい一緒にやって最終的にカンパニーメンバーとして声をかけさせてもらったのだけど、それはよかったな、と思いましたね。その後、長く一緒に付き合っていきたいから、人選って難しいですよね。

関　難しいですね。私は、いつも「うごうご」と呼んでる、ウォーミングアップの中で、私の身体の捉え方や動かし方をみんなに伝えていくんですけど、それをオーディションでもやっています。それで振りをどう変えていってくれるかとか、想像力とか、コンタクトワークの中でうまくできない時にどう向き合っていくか、相手とどう身体で会話してるんだろうとか、そういうのを見ます。今回のオーディションで踊れる人ももちろんいっぱいいて、選んだ子の中にもいわゆる踊れる子はいるんですけど、自分にとって新しい身体の言語に出会う過程を楽しめる人であるっていうのを求めちゃうかな。最初は訳わかんないと思うんですよね、私の使っている言葉の意味が。ユキオさんが言ってたみたいに、私も手探りでこの言い方で届くのか、こう言うと混乱させちゃうのかな、とか探しつつ。

ユキオ　関さんは、今の作品スタイルが確立されていると思うのだけど、それってある時からなんとなく生まれてきたものなの？

関　それは、アレです（笑）。ユキオさんが室伏鴻さんのアシスタントで入っていた「ラボ20」で作った作品だから、2008年からですかね。その直前に、イスラエルでオハッド・ナハリンのGAGAインテンシブを受けて、そこで自分の身体と付き合う方法に出会った、と思いました。（私は）バレエをやってて、バレエのレッスンも好きだけど、一人稽古が出来る、私の身体の言葉を探すやり方ってなんだろうかと悩んでいた時に、GAGAでこういう風に自分の身体を見ていくんだという事を知って、前に作っていた作品とガラッと変わり「ゆきちゃん」という作品ができました。脳科学や身体の本、生物の本を読んだりして生き物はこういう風に捉えているんだ、とかいろんなものを取り入れて、試して、積み重ねながらじわじわと更新してます。もちろん参加してくれるダンサーから受け取るものも、特にクリエイションに関してはあるし、あとは貞太くん*からの影響もあるので、武術的な身体を知ったりとか。

ユキオ　関さんの作品を見る時に、「肉感」と「奇形感」みたいなものがあって、そこに在る身体を長く眺めている時に、肉体感、肉感、を感じる時と、身体のメタモルフォーゼの中に生まれる「奇形感」が、両方みえてくる。その辺は意識したりしているのかな？ 自然にそういうダンサーを選んだり、あるいは、クリエイションの中から自然に滲み出てきているのかな？

関　身体は絶対そこに在って欲しい。みんなにはよく身体で会話してって言います。皮膚を通したり、いわゆる西洋的なコンタクトではないコンタクトをとっていくので、相手の身体も使って自分の中の密度を上げたりしていると、肉感的なものが生まれてくるのかな。ユキオさんがエネルギー的なことを言ってるかわからないけど、そのエネルギーみたいなものが出てくるかなと思う。「奇形」っぽいものというのは自分では意識していないのですが、おそらく、それぞれダンサーが自分の身体を捉えていった時に、例えば指はここから、でなくて、肘から指だと捉えて動いているとか、前腕とか曲がらないところにも曲がる可能性があるとか、肘の内側で触りたがってるなとかいうことをやっていくと、自ずとああいう動きになって、外から見た時にそう思われるのかな、と。

ところで、ユキオさんってどんどん振り、生まれます？

ユキオ　僕、苦手で。でもわりと最近、やりだすと早い。わーっとダンサーに振りを渡していく、でも僕は、自分では覚えてないので、ダンサーは大変なんですね。しかもダンサーが間違えたのは、なぜかわかるという。「なんかそこ違うよね？」みたいな（笑）

関　　それ、わかる（笑）。私がユキオさんの稽古場に伺った時に拝見したシーン、一瞬、ユニゾンになったりするのって計算して作ってます？

ユキオ　そうなるように自分の中では思っているのだけど、振りを渡すときはダンサー一人一人のことだけを考えて作るかな。それでやってみて、でも、ピッタリ合わないから、そこから微調節が続きます。

関　　私、結構、試しの一発目がいいのがここ何年か続いてて、もう１回その奇跡を追い求めて、１日が終わるという。

ユキオ・関　（同時に）映像、撮らないんだよね。

関　　そう、試しだから。今の、良かったじゃん。って。あれもう１回見たいのにダメですねー。
それぞれのダンサーが、預けた振りをどう変化させるか楽しみなんですけど、動きを見てるだけでは私は作れないって最近実感してきて、自分の身体性で作るというか、自分が動いて、あ、これ出来るじゃんって、遅ればせながら自分の身体のエンジンをかけてクリエイションをしなくてはって思っています。　（後編に続く）

*貞太くん：岩渕貞太（振付家・ダンサー）

関かおりPUNCTUMUN 『むくめく む』

【日程】 2/28(金) 〜 3/1(日)
【会場】 シアタートラム
【演出・振付】関かおり　【振付助手】後藤ゆう
【出演】内海正考　後藤ゆう　酒井和哉　清水駿　杉本音音　髙宮梢　ほか

鈴木ユキオプロジェクト warp mania #2
『人生を紡ぐように 時の流れを刻むように』

【日程】 3/6(金) 〜 3/8(日)
【会場】 シアタートラム
【振付・演出・出演】鈴木ユキオ
【出演】安次嶺菜緒　赤木はるか　田端春花　山田暁　栗朱音　阿部朱里